明治30年代の小説における性差と文末表現

任　　利

1. はじめに

現代日本語においては、男性と女性の発話に大きな違いが見られる。このような言語使用における性差は、いつ頃から形成されてきたのか。本稿は、明治30年代の娯楽的な小説の会話文資料をもとに考察する。

明治30年代の小説を取り上げて考察する理由は、以下の二点である。

① 東京語・標準語が独自の性格をもって確立したのは明治30年代であると言われている[1)]。

② 日本語の男女差、特に文末表現に現れる男女差が現在のようになったのは明治30年代遅くとも明治の末期になってからであると言われている[2)]。

小松（1988）は「東京語の文末辞の男女差は、明治以降30年代までにつくられたものであろう。それは、明治東京語の形成とほぼ重なる、というよりその一環として行われたものと考えるのである」と述べている[3)]。明治30年代は日本語に標準語が生まれる過程で、男女の言葉づかいに対する言語規範も同時に形成されたのではないかと考えられる。こうした動きの中で、当時の作家たちが、作品中の人物に語らせているセリフは興味深い言語資料となる。本稿では、明治30年代に発表された小説に登場する男性と女性の会話文を対象として、主に文末形式における性差を探ってみたい。このように、言語形式を歴史的に見てみることは、現代日本語における性差がどのようなプロセスにより構築されてきたのか、現代社会における男性のステレオタイプ、女性のステレオタイプの記号化された表現がどのように形成されてきたのか、というような問題の解決にとって重要な手掛かりになると思われる。

2. 明治期文末表現における性差の研究

明治期の文学作品に基づいた、文末表現における性差に関する研究としては、石川（1972）、小松（1988）、中野（1991）、森野（1991）、遠藤・尾崎（1998）、鈴木（1998）、又

平（2000）、寺田（2000、2001、2002、2003）、長本（2002）などがあげられる。これらの研究は様々な視点でなされているが、研究の成果を簡単にまとめると以下のようになる。

- 現代日本語にみられる性差は江戸時代に遡らず、近代明治期に入ってから形成された。
- 文末の「てよ」、「だわ」、「のよ」など近代女性特有の表現は明治20年代前後から見られ、30年代前後に定着した。しかし、これらの表現は当初有識者の顰蹙を買った。

これらの成果は現代日本語における性差の研究に大きな意義があると思われるが、いくつかの問題点も残されている。以下に示す。

i　明治30年代が現代日本語における性差の形成にとって重要な時期であることが認識されているが、その時期における性差に関わる言語使用実態については、充分に記述されているとはいえない。

ii　一部の研究を除き、ほとんどの研究はいわゆる女性語、即ち女性側の使用に注目して研究を行ってきた。同時に男性側の使用分析はほとんどなされていなかった。性差の形成は一方の性のみの言語使用ではなく、両方の使用をみる必要があると思われる。

iii　男女両方の使用を分析した研究は文末の形式による分析に偏り、文末形式の意味用法について充分に考慮しているとはいえない。性差の研究は男女の使用差を見るだけではなく、文末形式の意味用法（例えば疑問、感嘆、命令など）と性差表示との関連について考慮する必要があると思われる。

iv　一番大きな問題であると思われるのは、これらの研究は従来の「女性語・男性語」、あるいは「女ことば・男ことば」という枠組みで性差を捉えている点である。つまり、二項対立的な視点から言語上の性差を捉えているのである。しかし、言語使用の実態を観察すると、言語使用の形式は話し手の性別と固定的に強く結びついていないケースが多いことが分かる。言語における性差は必ずしも単純に二つに分けられるわけではないのである。

本稿では先行の諸研究を踏まえた上で、「女性性・男性性」という概念を導入し、明治30年代に発表された小説における性差を検討していく。

3.「女性性・男性性」の概念について

言語における性差を述べるときに、性差マーカーという概念がよく使用される。即ち、

使用者の生理的な性の特徴、つまり使用者は男性なのか、女性なのかを明示する言語表現を性差マーカーと呼ぶ。例えば、人称代名詞の「ボク・オレ・アタシ」や、文末表現の「ワ・ゼ・ゾ」などのような言語表現は性差マーカーとされる。従来の性差研究では、このような性差マーカーを「女性語・男性語」、あるいは、「女ことば・男ことば」という枠組みで捉えている。その背後に、女性だから「女性語」を用い、男性だから「男性語」を用いる、あるいは女性が使うことばは「女ことば」であり、男性が使うことばは「男ことば」である、という二項対立的な性差の捉え方が存在している。

しかし、このような性差マーカーは性質により、また二種類に分けられる。一つは一方の性のみが使用する、絶対的なものであり、もう一つは一方の性の使用に傾いている、相対的なものである。前者を「相互排除的性差表現」(sex-exclusive differentiation)、あるいは「絶対男性語・絶対女性語」と呼び、後者を「傾向的性差表現」(sex-preferential differentiation)、あるいは「相対男性語・相対女性語」と呼ぶ[4]。即ち、言語上の性差マーカーは「女性語・男性語」のような二項で分類しきれない多様性があるのである。

したがって、性差マーカーを捉える時、二項対立的な視点より、度合いの差で捉える方が有効であると思われる。本稿は、そういう立場から、「女性性・男性性」[5] という概念を導入し、言語における性差マーカーを探ってみる。即ち、極端に女性性の強い言語表現(いわゆる「絶対女性語」)という軸と、極端に男性性の強い言語表現(いわゆる「絶対男性語」)という軸を立てれば、実際に使用される言語は、この両極端の間のどこかに位置づけられるという視点で言語上の性差を把握する。

また、「女性性・男性性」の強い言語表現は使用者の生まれつきの自然の性別に強く結びつく固定的・不変なものではなく、可変的なものである。即ち、女性だから常に女性性の強い言い方をし、男性だから常に男性性の強い言い方をする、というように、言語形式の選択が話し手の自然の性と固定的に結びつくのではなく、話し手が自己をどのように見られたいかという自己表出意識をもって言語形式を使っていると考える。社会通念上の「女性」の一面を積極的に出す場合、「やさしさ・婉曲」のニュアンスを含む女性性の強い言い方をし、「男性」の一面を積極的に出す場合、「たくましさ・率直さ」を含む男性性の強い言い方をする、というように、言語運用の面では、言語形式の性差は「女性性・男性性」の表出の度合いで捉えられると考えるのである。

4. 調査概要

4.1. 調査資料及び調査対象

今回調査した資料は、明治30年代に発表された10編の小説である。詳細は本稿末を参照されたい。これらの小説はいずれも明治期の東京を舞台に、主に若い男女の恋愛模様[6] を描いたものである。本稿は、男女の登場人物の会話文のみを調査対象とした。ただし、「です」、「ます」、「ございます」のようないわゆる丁寧体の会話文を排除した。一

般に、「女性は男性より丁寧な言い方をする」とよく言われる。言語における性差の問題は丁寧な言葉遣いと切り離して考えられないのはもちろんであり、丁寧体の発話における性差は性差全体像の研究に欠かせない重要な一部分であると思われる。しかし、丁寧体の発話には性差以外に、年齢差、身分差、親疎差などの複雑な要因が絡んでいる。一方、丁寧体を含まない会話文には性差という要因が明確に見られるのではないかと思われ、今回は丁寧体を除いた会話文だけに的を絞って調査を行った。丁寧体の会話文の調査は今後の課題にする。

4.2. 分析対象とした文末形式

本稿の分析対象は疑問を表す文末形式に限定することにした。疑問とは、情報取得をめぐる話し手と相手の間の言語行為である。普通の発話より、話し手と相手が常に互いの立場を意識しながら、自らの言葉遣いに気を遣うことになり、男女の差が言語形式の中に現れやすいのではないかと思われる。本稿では、ある表現が疑問を表す表現と認められるのは、話し手が何らかの情報を求め、それに相手が答えるという関係を構成する時である、と考える。質問として機能する場合だけでなく、聞き手から確認・同意・反応を求めるという確認要求表現として機能する場合も含まれることになる。したがって、分析対象とした文末形式は以下の21項目である。いわゆる終助詞が中心であるが、助動詞と終助詞の複合形式も含まれている。この中には、複数の用法を持っている形式もあるが、本稿は疑問の用法を持つ用例のみを取り扱うことにした。

か／かい／かえ／かしら／かしらん／かな／かね／かの／こと／だい／だえ／だな／だね／だよ／て／な／ね／の／のね／のよ／わね

5. 調査結果・分析

5.1. 性差表出の多様性

次のページの表1は調査結果である。表1から分かるように、文末形式の使用に様々な性差が見られる。

まず、登場人物の女性あるいは男性のいずれか一方の性のみが用いる形式が見られる。これらの文末形式は女性性・男性性の概念で捉えてみると、その両極端に位置づけられ、女性性及び男性性の一番強い言語表現形式である。

・著しく女性性の強い形式→「こと」、「のね」、「のよ」、「わね」
・著しく男性性の強い形式→「かな」、「だな」、「な」

表1	男性登場人物		女性登場人物	
	使用者数	使用例数	使用者数	使用例数
か	61	291	3	9
かい	33	140	23	106
かえ	4	9	7	26
かしら	23	47	26	61
かしらん	28	40	3	7
かな	24	105	0	0
かね	22	157	18	105
かの	2	3	1	1
こと	0	0	7	14
だい	21	67	11	30
だえ	6	11	8	17
だな	34	78	0	0
だね	26	130	5	28
だよ	2	3	2	2
て	1	1	27	218
な	13	30	0	0
ね	5	11	7	33
の	9	22	63	343
のね	0	0	18	64
のよ	0	0	4	6
わね	0	0	5	8
計	1145		1078	

＊男性登場人物は 118 人、女性登場人物は 95 人。

(1) F「貴女は、直ぐに風を感くのねえ」と凝然とその服装を眺めて、「薄着だわ、夫で寒か無いこと？」
F「暖かだわ、(略)」 (魔・萩原初野→夏本芳江) [7]

(2) F「まだ私にお隠しなすつては、お一人で泣いて入らつしやる事があるのね。」
F「いいえ諦子様、決して私、そんな貴女に隠すなんて……」
(紺・諦子→お扇)

(3) F「貫一さん、ま……ま……待つて下さい。貴方これから何……何処へ行くのよ。」 (金・お宮→間貫一)

(4) F「でも……お兄さんと云ふ事は被仰つたわね？」 (青・小野繁→香浦園枝)

(5) M「山下君、貴君は子を持つて居でかな」
M「はツ。愚息が一人に一娘が一人でムいまして、何分御引き立てをー」
(不・片岡中将→山下)

(6) M「時に、君は獵官運動を始めたさうだナ？」
M「夫が馬鹿々々しいんだ。(略)」 (社・新聞社主筆→乾坤一)

(7) M「お前の養父様が預かつてるな？」
M「は……。中々干渉家ですから……。」　(魔・東一→東吾)

(1)から(4)までが著しく女性性の強い形式の使用例である。(5)から(7)までが著しく男性性の強い形式の使用例である。小説内容から判断してみると、女性発話者の萩原初野、諦子、お宮、小野繁などはいずれも日常的にも女性らしい振る舞いをする女性として描かれている。男性発話者の片岡中将、新聞社主筆、東一などは平素男性らしい振る舞いをする男性として描かれている。そのような登場人物の女らしさ、男らしさは上のような形式によって表わされているということができよう。

しかし、登場人物の女性あるいは男性のみが使用する文末形式はやはり少数であり、多くは女性と男性両方に使用例のある文末形式である。これらの形式は女性性・男性性の両極端の間に位置づけられ、度合いの差によって、より女性性の強い形式、より男性性の強い形式及びニュートラルな形式に分けられる[8]。

・より女性性の強い形式→「て」、「の」、「かえ」
・より男性性の強い形式→「か」、「かしらん」、「だい」、「だね」
・ニュートラルな形式→「かい」、「かしら」、「かね」、「ね」、「だえ」

著しく女性性・男性性の強い文末形式が発話者の女性性・男性性を最も強く表出できる言語形式であるとすれば、ニュートラルな文末形式は発話者の女性性・男性性を表出できないあるいは表出する必要のない場合に使用される言語形式であろう。言い換えれば、著しく女性性・男性性の強い形式は発話者の生まれつきの自然の性別と強く結びつくために、言語における性差を一番顕著に表すが、ニュートラルな形式では、女性性・男性性が中和されて、性差が消えるのである。いずれも、作家の創作意図なり登場人物の発話ストラテジーなりによって選択されていると考えられる。問題になるのはその間に位置づけられ、度合いの差がある性差表現である。次はこれらの表現に焦点をあて、具体的に使用する場面と発話者のストラテジーを検討していく。

5.2. 度合いの差による性差の側面

以下、いくつかの文末形式を取り出して具体的な用例を見ながら、度合いの差による性差の側面を見ていく。

5.2.1. 男性性の強い形式「か」「だい」「だね」の使用

まず、より男性性の強い形式である「か」、「だい」、「だね」の使用から検討していく。

・【か】
(8) M「梅ちやん見たのか。」

F「見ましたとも、徐と二階に昇つて……」　（魔・東吾→お梅）

(9) M「君は知つているか？」

M「知つてるかとは？義太夫なら僕も是でなかなか趣味を持つて居る。(略)」

（青・速男→北小路）

(10) M「浪さん、草臥はしないか」

F「否、些も今日は疲れませんの。(略)」　（不・武男→浪子）

終助詞「か」は最も直接に疑問を相手に投げかける文末形式の一つである。調査結果から分かるように、使用者はほとんど男性登場人物である。疑問があればそのまま直接に相手に問いかけたりするのは「たくましさ・率直さ」というニュアンスを含む男性性の表出にふさわしい行動であろう。男性登場人物が「か」を選択するのは、その男性性の強い一面を積極的に表出するための発話ストラテジーによるものであろう。

しかし、終助詞「か」は男性性の強い文末形式とはいえ、女性登場人物の使用例がないわけではない。どんな場合に女性が「か」を用いるのか、女性の使用例を検討してみよう。

(11) F「お前様、篠やに暇を出したのを知つてお居でか。」

M「先刻そんなお話でした。」

F「それならどういふ分で出したのだか、知つてお居でか」重ねて訊ぬれば、

M「いゝえ、知りませんが……。」　（紺・お淑→暁之助）

(11)は中年の女性お淑が息子の暁之助に対して用いる例である。(11)を詳しく見てみると、「いる」の尊敬語「お居で」の後ろに「か」を使っており、「知つてお居でか」のように尊敬語と併用する形になる。男性の「か」の使用例と違い、丁寧度が高くなっていることが分かる。女性の使用例を見てみると、ほぼ全例が(11)のように、中年の女性が身内の息子や娘・嫁などに対して用いた例である。つまり、女性の場合、会話で「か」を用いるのは比較的高い年齢層の女性で、しかも身内の目下の者を相手に用いる場面に限られる。かつ、敬語表現と併用する形が特徴的である。このような限られた場面、しかも敬語表現との併用から見てみると、発話者の女性性・男性性の表出という性差表現より、むしろ待遇表現と絡んでいる面が強いのではないかと思われる。

同じようなことが「だい」と「だね」の使用にも見受けられる。調査結果を見る限り、「だい」と「だね」の使用者は主に男性登場人物である。助動詞「だ」が含まれているため、文末の響きが強くなり、男性性の強い言語形式になるのであろう。以下の用例から読みとれるように、文末に「だい」を用いて問いかけたり、「だね」を用いて確認・同意を求めたりするのは発話者の男性性を表出する発話ストラテジーになる。

・【だい】

(12) M「君も余り腕車を飛ばすと頭を悪くするよ。少と地方へ逃出しちやア什麼だ

い、はツはツはツ！」　（社・乾坤一→甲君）

(13) M「一躰園枝、那女は何所の者だい？」
F「え、何に？兄さん。」　（青・速男→園枝）

(14) M「学校の方の出来は何うだい。」
F「良いの。そりやア余ツ程良いの。」　（観・奥隅正也→晴子）

・【だね】

(15) M「喜多山君、君は労働運動で大分名を売出したやうだネ。」
M「名は売出しても銭は儲からんからカラキシ駄目だ。」
（社・才東君→喜多山君）

(16) M「此あ如何だね？」
M「其奴は話せない奴だ。(略)」　（不・山本→千々岩）

(17) M「で、いつ行つたのだね？」
M「四五日前ー」　（不・武男→老爺）

一方、少数でありながら、女性登場人物の使用例が見られる。

(18) F「何が……？何方が分らないんだい？」　（魔・東吾の母→東吾）

(19) F「今日は何処へお廻りだい？」
F「買物の歸途に米倉お富美さんの許へ寄つて来ました。」（社・姑→新妻君）

(18)は東吾の母親が東吾を問いつめる場面での使用例である。(19)は姑が嫁に問いかける場面に用いられる例である。

(20) F「ぢや、お前の都合よりか、芳江様の都合から云ふ事なんだね？」
（魔・東吾の母→東吾）

(21) F「死んでも誰一人泣いて呉れる者もない位では、生甲斐のないものだね、千鶴さん」　（不・加藤子爵夫人→娘の千鶴子）

以上の「だね」の二例も年配の女性が息子・娘を相手に用いる例である。「だい」と同様、発話者は年配の女性で、相手は身内の目下に当たる息子や娘・嫁などに限られている。上記の「か」と同様に、発話者の女性性・男性性を表出するために用いる性差表現とは認めがたい。むしろ、目上から目下へという待遇表現の側面が強いと思われる。このように、従来性差と認識していた形式には待遇表現と絡み合ったものがある。

5.2.2. 女性性の強い形式「て」「の」の使用

次に、女性登場人物が多く使用する女性性の強い形式である終助詞「て」、「の」の用

例を見てみる。以下の用例から分かるように、「て」、「の」などを用いると、自身の疑問を相手に提示する形になり、柔らかくより間接的な問い方になる。女性の発話ストラテジーとしては、より間接的に、より丁寧に話すことが求められる。登場人物の女性が頻繁に「て」、「の」を用い、質問したり、確認同意を求めたりするのはその「やさしさ・婉曲」というニュアンスを含む女性性を積極的に表出する発話ストラテジーによるものであろう。

・【て】

(22) F「不図然う思い出したら、毎日那様事ばかり考へて、可厭な心地になつて、自分でも如何う為たのか知らんと思ふけれど、私病気のやうに見えて？」
M「それは病気だ！」 (金・お宮→間貫一)

(23) F「今日は兄様、御用があつて？」
M「御用？御用は有り過ぎて暇な位だから。」 (紺・諦子→兄の三千雄)

(24) F「義姉さんは、幾日許し費ると思つてて？」
F「三日も立てば、最う身体を動かしても可いつて云ふからね、私は、五日か……長くも一週間位で退院されるものと思つてよ。」
(魔・夏本芳江→萩原初野)

(25) F「何か差支でもあつて？」
F「差支つて別に無いけれど……だつて……。」 (青・香浦園枝→小野繁)

・【の】

(26) F「貫一さん、如何して那様に酔つたの？」 (金・お宮→間貫一)

(27) F「えゝ、其れは可いわ。だけど、貴方唱はないの？」
F「はあ、困るわ。」 (青・香浦園枝→小野繁)

(28) F「妾、秋葉さんと一緒に洋行するの？」 (社・千鶴令嬢→老伯爵)

しかし、女性性の強い形式である一方、男性登場人物の使用例がないわけではない。男性がどんな場合に終助詞「て」、「の」を用いるのか、男性の使用例を検討してみよう。

男性の「て」の使用例では以下の(29)の一例しか見られなかった。

(29) M「阿母様、どうかなすつて？」 (紺・暁之助→お淑)

(29)は暁之助がヒステリー性で倒れた母親お淑を看護する場面で用いた例である。極めて特殊な場面で用いられた稀な例であるが、ここでは女性性の強い形式「て」を用いることによって、主人公の暁之助が神経的な病気にかかった母親に配慮しながら、「やさしさ」の一面を表現したのではないかと思われる。

男性による「の」の使用例は以下である。

(30) M「お宮さんは、何ですか、恁云ふ田舎の静かな所が御好きなの？」
(金・富山唯継→お宮)

(31) M「お蝶さん、これでも通れないの？」と一層爪たつて身をすぼめた。
(骨・鶴吉→お蝶)

(32) M「私の事を、まだ姉様に秘してるの……？過日のお銭のことも？」
(魔・殿井恭一→お波)

(30)は富山唯継がまもなく自分の妻になるお宮に対して用いた例である。(31)は鶴吉が将来妻になるお蝶に対して用いた例である。(32)は殿井恭一がまだ子供である少女お波に対して用いた例である。男性登場人物の「の」使用例を詳しく見てみると、いずれも親しい関係にある女性及び子供との会話の中に現れた例である。このような場面では、発話者が積極的に男性性の強い一面を出すのではなく、相手との親しい関係、自身の「やさしさ」の一面を優先的に表す傾向がある。「やさしさ」のニュアンスを含む女性性の強い形式を選択することによって、その目的を達するのである。

5.2.3.「かしらん＞かしら」における性差

最後に、ニュートラルな形式である終助詞「かしら」[9] の使用について見ていくことにする。終助詞「かしら」が「かしらぬ＞かしらん＞かしら」という歴史的な変遷をたどってきた自問形式であることは周知の通りである。今回の調査結果から見ると、「かしらん」と「かしら」の形式が並行的に用いられていたことが分かる。明治30年代前後は終助詞「かしら」の語形成における過渡期であろう。新形式「かしら」の使用には男女の使用差があまり見られないが、旧形式である「かしらん」の使用者はほとんど男性登場人物である。女性の「かしらん」の使用例は以下の(33)のような独言にしか見られない。会話では、女性が新形式である「かしら」の使用に傾いていることが分かる。

・【かしらん】

(33) F「はあ、それでは違ふか知らん。」 (金・お宮の独言)

(34) M「彼馬鹿娘も仕様がないね、浪さん。彼様な娘でも貰人があるかしらん。はゝゝ」 (不・武男→浪子)

(35) M「あ、兄さんでお有りるか知らん？」 (青・郵便脚夫→お房)

・【かしら】

(36) M「ハハハハ、余り僕が怖いと見えるね、是で、僕は其様な強敵かしら」
(初すがた・笠山→女中)

(37) M「聞こえたか知ら？」
F「貴方、あまりお声が高いんですもの……。」 (魔・殿居恭一→主婦)

(38) F「今度ねえ、あの、……姐さんにさう言つて貴方ん所へ買物に行かうか知ら。」
M「あゝ……。」 (紺・お純→暁之助)
(39) F「有難う、今日は私、何う為やうか知ら……」 (青・小野繁→関欽哉)

数量的に見ると、旧形式である「かしらん」は男性性の強い形式であり、新形式である「かしら」はニュートラルな形式であると判断できる。しかし、「かしら」の使用例を詳しく見てみると、男女の使用には場面差が見られる。男性の「かしら」も女性の「かしら」も意味的には同じで、話し手の自問を示すのだが、男性の場合は(36)(37)のように、聞き手に遠慮せず、自らの疑問を表明するだけである。一方、女性の「かしら」の場合は、自分自身が抱いている疑問を聞き手に知らせ、その疑問を聞き手と共有し、実質的には聞き手に相談したり、聞き手の反応を求めたりする気持ちを含ませているのである。(38)はお純が本心では暁之助の所に行きたいのだが、このことについて暁之助の反応を聞きたい気持ちが含まれている。(39)は小野繁が本当はこれからの自分の行動について関欽哉に相談したいという期待が含まれている。ただし、いずれも直接的な問いかけを避け、より間接的な言い方を取っている。女性が「かしら」を多く使用するようになるのは、より間接的、より丁寧な発話の仕方を選ばなければならないという女性の発話ストラテジーの反映であろう。このように、新形式である「かしら」が女性性の強い形式になる動きを見逃すことができないと思われる[10]。

6. 女性性・男性性の構築とステレオタイプの形成

以上、明治30年代に発表された小説の会話文を調査した結果を見てきたが、文末形式の使用には、様々な性差が見られることが分かった。著しく女性性・男性性の強い形式が見られる一方、女性性・男性性の両極端の間に位置づけられる、より女性性の強い形式、より男性性の強い形式、ニュートラルな形式という、度合いの差による性差が見られる。

・著しく女性性・男性性の強い形式は言語上の性差を明確に表す。
・度合いの差による女性性・男性性の強い形式は使用する場面と相手によって使い分けられる。
・ニュートラルな形式は性差と無関係とは必ずしも言い切れない。

明治期に入り、明治政府は新しい近代中央集権国家を作るために、様々な政策を行っていたが、言語政策の面では標準語化運動の推進、教育の面では、上から意図的に、「男は男らしく、女は女らしく」という近代公教育が行なわれていた。特に、「良妻賢母」[11]

という女子教育がことさらに行われていた。このような背景の下で、新しい言語規範の形成が進んでいくと同時に、新しいジェンダー規範も形成されつつあったということができる。

今回の調査の対象である明治30年代には、言文一致の運動、口語文典の盛行、国定教科書の編修、小学校における標準語教育の促進などが盛んに行われていた。この中でも、言文一致の確立は、小説の文末表現に大きな影響を与えていた。当時の小説の会話文は、形成されつつある新しい言語規範を反映すると同時に、新しいジェンダー規範を反映している。登場人物の台詞の、特に文末表現に顕著な性差が描写されているのはその反映であると思われる。

今回の調査でも、女性のみが使う表現形式や女性性の強い表現形式が女子学生や女学校出身の若い女性登場人物によって多く用いられていることが分かる[12]。このような明治期に特有の女子学生という存在は、近代日本社会のジェンダー形成において重要な役割を持つ社会階層である。彼女らの言葉づかいは当時の有識者たちから批判されつつ、後にほぼ一定の型に定まったような形で定着していく[13]。そういった意味で、近代女性のステレオタイプはこのような女子学生の言葉づかいから始まっていると考えられる。現在のいわゆる女性語およびお嬢様ことばの原型を当時の小説に見出すことができるのである。一方、男性の登場人物として様々な階層の人物が描かれているが、いずれも明治以後の近代社会に形成された新しい階層である。このような人物の発話もまた近代男性のステレオタイプとして確立していく。

このような「女性のステレオタイプ」と「男性のステレオタイプ」は小説などのメディアにより、ますます強化され、より広く浸透し、「女性はこのような話し方をすべき、男性はこのような話し方をすべき」というように、いわゆる女性のことば、男性のことばとして定着していくのである。近代のいわゆる女性語、男性語の確立は、このようにして進んでいったのであろう。

7. おわりに

本稿では、「女性性・男性性」という概念を導入し、明治30年代の小説における性差と文末表現を考察した。その結果、現代日本語における女性性・男性性の強い表現形式は明治30年代の小説に既に出そろっていることが分かった。女性の発話に求められる「やさしさ・婉曲」というニュアンスを含む女性性の強い言語形式と、男性の発話に求められる「たくましさ・率直さ」というニュアンスを含む男性性の強い言語形式から構築された言語における性差の現れ方は、現在と根本的に共通していることが見受けられる。また、現代男女の言葉づかいに対する言語規範、及び男女のステレオタイプは明治30年代に既に確立していたことが認められる。

しかし、いくつかの課題も残されている。まず、今回の調査対象は小説であり、この

ような、作家の手による創作的な文芸作品がどのくらい近代語史を反映していたのかという点は問題として残る。次に、分析の対象として丁寧体の会話文を除いた点である。今後、丁寧体の調査を含め、性差の全体像を描く必要がある。最後に、現代日本語における性差の形成のプロセスを探るために、同じ基準で現代日本語の調査をする必要もあるだろう。

今回の調査によると、従来性差と認めていたものには、実際には待遇表現と複雑に絡み合っているものがある。言語における性差の問題と待遇表現との関係を再整理し、両者の絡み合う箇所、分離する箇所を記述していかなければならない。

注

1）東京語の成立と展開については、中村（1948）、松村（1957･1998）、飛田（1992）などの論考がある。研究の立場により、見解はそれぞれ異なっているが、明治30年代に至って、東京語独自の性格が確立したという点では意見が一致している。その時期に特徴的な出来事として、言文一致の確立、口語文典の盛行、国定教科書の編修、小学校における標準語教育の促進などが挙げられるという。本研究の対象は文末表現であるが、言文一致の運動及びその確立は小説などの文末表現に大きな影響を与えたと考えられる。

2）石川（1972）、小松（1988）、鈴木（1998）、寺田（2000・2001）などの諸研究による。

3）小松（1988）（p.102）

4）「相互排除的性差表現」(sex-exclusive differentiation)と「傾向的性差表現」(sex-preferential differentiation)はBodine, Ann(1975)が提唱した概念である。Bodine, Ann (1975) では「the forms which were described under the rubric "men's and women's languages (or speech)" were generally exclusively used by either one sex or the other. This type of differentiation, which may be called sex-exclusive differentiation. Differences in frequency of occurrence of any form between the speech of women and men, which may be called sex-preferential differentiation.」と、「sex-exclusive differentiation」と「sex-preferential differentiation」という概念を用い、性差を捉えた（p.131）。一方、「絶対男性語・絶対女性語」及び「相対男性語・相対女性語」は寺田（2000）が使用した概念である。寺田は「女性だけが使用し、男性は使用しない絶対女性語」、「男性だけが使用し、女性は使用しない絶対男性語」、「男性よりも女性が多く使用する傾向のある相対女性語」と「女性よりも男性が多く使用する傾向のある相対男性語」の4つに分類し、性差を捉えた（p.171）。

5）「女性性・男性性」という概念は中村（2001）が提唱した概念である。従来二項対立的ジェンダー観と結びつく「女らしさ」「男らしさ」と表記されてきたfemininityあるいはmasculinityを「女性性」「男性性」と表すことにし、二項対立に還元できない多様な「女性性・男性性」が存在していると主張したのである。むろん、中村（2001）の「女性性・男性性」は言語の問題のみをとりあげ、提案した概念ではない。本稿では、中村（2001）の「女性性・男性性」を借用し、言語における性差を捉える。

6）ただし、『社会百面相』は、純粋な恋愛物語というわけではない。

7）用例の前のマークは発話者の性別をさす。Fは女性、Mは男性である。用例の後にはそれぞれ作品の省略名、話し手→相手などを示す。また、用例のルビは適宜省略した。以下同様である。

8）「かの」、「だよ」などの形式は用例数自体が少なく、どちらの分類に位置づけるのか、より多くのデータ数が必要であるため、別の機会で検討したい。

9）用例の中には、「か知ら」と「か知らん」のような表記もあるが、ここでは表記を問題にせず、「かしら」と「かしらん」として取り扱うことにする。

10）終助詞「かしら」の使用における男女差の形成について、詳しくは任（2003）を参照されたい。

11）小山（1991）によると、良妻賢母思想は明治30年前後に確立したという。「良妻賢母思想とは、「男

は仕事、女は家庭」という、生産領域と再生産領域との分離、ならびに男と女という性による各々の領域の分担、この二点を前提として成立した思想である」(p.237) と述べている。

12) 例えば、今回挙げた用例では登場人物の萩原初野 (例(1))、諦子 (例(2))、小野繁 (例(4))、夏本芳江 (例(24))、香浦園枝 (例(25)) などは女学校に通っている女子学生である。お宮 (例(3))、浪子 (例(10)) は女学校出身の若い女性である。

13) 当時の有識者による女子学生の言葉に対する批判については、既に山本 (1971)、石川 (1972) によって紹介されている。例えば、尾崎紅葉による明治 21 年 6 月、『貴女之友』に「流行言葉」と題する文章には、「げす言葉」と、明治 23 年 7 月、『女学雑誌』の「雑録」という欄の「女性の言葉つき」(破月子) と題する文章には、「嫌な言語」と、明治 38 年 5 月、『教育時論』の「時事寓感」という欄の「言文一致」と題する文章には「卑陋なる言語」と、女子学生間に流行する言葉を非難・排斥している。

調査資料

①『金色夜叉』(明治 30 年・尾崎紅葉著) 明治文学全集 18　筑摩書房
②『不如帰』(明治 31 年・徳富蘆花著) 日本近代文学大系 9　角川書店
③『骨ぬすみ』(明治 32 年・広津柳浪著) 岩波文庫
④『初すがた』(明治 33 年・小杉天外著) 明治文学全集 65　筑摩書房
⑤『紺暖簾』(明治 34 年・山岸荷葉著) 明治文学全集 22　筑摩書房
⑥『社会百面相』(明治 35 年・内田魯庵著) 岩波文庫
⑦『魔風恋風』(明治 36 年・小杉天外著) 岩波文庫
⑧『和蘭皿』(明治 37 年・生田葵山著) 明治文学全集 22　筑摩書房
⑨『青春』(明治 38 年・小栗風葉著) 日本現代文学全集 11　講談社
⑩『観音岩』(明治 39 年・川上眉山著) 明治文学全集 20　筑摩書房
＊(　) の中はそれぞれ初出の年代と著作者である。

参考文献

石川禎紀 (1972)「近代女性語の語尾ー「てよ・だわ・のよ」ー」『解釈』18 巻 9 月号 pp.22-27　解釈学会
井出祥子・川成美香 (1984)「日本の女性語・世界の女性語」『言語生活』387 号 pp.32-39　筑摩書房
遠藤織枝・尾崎喜光 (1998)「女性のことばの変遷ー文末・コト・テヨ・ダワを中心にー」『日本語学』17 巻 6 号 pp.56-79　明治書院
金水　敏 (2003)『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店
小松寿雄 (1988)「東京語における男女差の形成ー終助詞を中心としてー」『国語と国文学』65 巻 11 号 pp.94-106　東京大学国語国文学会
小山静子 (1991)『良妻賢母という規範』勁草書房
清水康行 (1991)「二十世紀初めの小説台詞における女性のことばー東京中流の女性のことばと標準語ー」『国文学 解釈と鑑賞』56 巻 7 号 pp.38-44　至文堂
鈴木英夫 (1998)「現代日本語における女性の文末詞」佐々木峻、藤原与一編『日本語文末詞の歴史的研究』pp.139-164　三弥井書店
土屋信一 (2003)「日本語における女性の言葉の捉え方とその通時的研究」『共立国際文化』20 巻 pp.1-11　共立女子大学国際文化学部紀要
坪井美樹 (2003)「男手・女手ー「性差」による表記様式の分類ー」『筑波日本語研究』8 号 pp.1-21　筑波大学日本語学研究室
寺田智美 (2000)「明治末期の女性語についてー夏目漱石の小説にみえる「絶対女性語」の考察ー」『紀要 (早稲田大学日本語研究教育センター)』13 pp.169-187
――― (2001)「明治末期の男性語についてー夏目漱石の小説にみえる「絶対男性語」の考察ー」『紀要 (早稲田大学日本語研究教育センター)』14 pp.201-219
――― (2002)「夏目漱石の小説にみえる「相対男性語」の考察ー女性が使用する場合を中心にー」『紀

要（早稲田大学日本語研究教育センター）』15 pp.179-197
――――（2003）「夏目漱石の小説にみえる「相対女性語」の考察－男性が使用する場合を中心に－」『紀要（早稲田大学日本語研究教育センター）』16 pp.143-159
中野伸彦（1991）「江戸語における終助詞の男女差－女性による「な」の使用について－」『国語と国文学』68巻4号 pp.44-58 東京大学国語国文学会
中村通夫（1948）『東京語の性格』川田書房
中村桃子（2001）『ことばとジェンダー』勁草書房
長本明美（2002）「文学作品の会話中の文末詞に見られる性差－明治期を中心として－」『日本語文化研究』5号 pp.13-28 比治山大学日本語文化学会
任　　利（2003）「終助詞「かしら」における男女差の形成－近代小説における用例調査を中心に－」『筑波日本語研究』8号 pp.72-89 筑波大学日本語学研究室
飛田良文（1992）『東京語成立史の研究』東京堂出版
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版
又平恵美子（2000）「明治・大正期の文末表現－終助詞「わよ」－」『筑波日本語研究』5号 pp.53-69 筑波大学日本語学研究室
松村　明（1957）『江戸語東京語の研究』東京堂
――――（1998）『増補　江戸語東京語の研究』東京堂出版
森野宗明（1991）「女性語の歴史」『講座日本語と日本語教育』第10巻 pp.225-248 明治書院
山本正秀（1971）「近代小説の女性語」『解釈』17巻12月号 p.1 解釈学会
Bodine, Ann (1975) “Sex Differentiation in Language” Language and Sex: Difference and Dominance. Eds. Barrie Thorne & Nancy Henley Rowley, Mass:Newbury House pp.130-151

（ニン　リ　筑波大学大学院博士課程　人文社会科学研究科　日本語学）